

カナダの
文学

la littérature canadienne

5

わが心の子らよ

ガブリエル・ロワ
真田桂子訳

Ces enfants de ma vie



ガブリエル・ロワ

1909年カナダのマニトバ州サン・ボニファスに生まれる。郷里で小学校の教師をした後、1938年ヨーロッパに留学。帰国後ケベック州モントリオールに在住し1945年『かりそめの幸福』によって作家となる。デビュー作や『アレキサンドル・シュヌペール』(1954)など社会派の小説を経て、『わが心の子らよ』をはじめマニトバを舞台にした自伝的な小説を数多く書く。その他『神秘の山』(1961)『この世の果ての庭』(1975)など十数編の小説、エッセイ、子供向けの作品を残す。自伝『絶望と魅惑』(1984)も有名。カナダ総督賞をはじめ数々の賞を受賞し、フランス系カナダ人として初めてフランスの権威ある文学賞の一つフェミナ賞も受賞。今世紀カナダを代表する最も重要な作家の一人。1983年没す。

真田桂子 (さなだ けいこ)

阪南大学助教授。大阪大学文学部卒。カナダ政府奨学生としてモントリオール大学大学院に留学。主要著書および論文は、『比較文化キーワード①』(共著、サイマル出版会、1994年)、『La claustration dans l'œuvre de Kenzaburo Oé et celle d'Anne Hébert』. (*Revue internationale d'études canadiennes*, No.6, 1992), 「ガブリエル・ロワにおける異邦—80年代以降のケベック文学の動きに照らして—」(『カナダ研究年報』15号、1995)、「ロワにおける異邦人のフィギュール」(『阪南論集』人文・自然科学編第32巻4号、1997)他。

カナダの文学⑤

わが心の子らよ

1998年12月25日初版第1刷発行

著者 ガブリエル・ロワ

訳者 真田桂子

発行者 竹内淳夫

発行所 株式会社彩流社

東京都千代田区富士見 2-2-2 郵便番号102-0071

電話03-3234-5931 ファクシミリ03-3234-5932

組版 有限会社ポイントナイン

印刷 株式会社平河工業社

製本 有限会社青木製本

ブックデザイン ローテリニエ・スタジオ

カバーイラスト 安藤千種

ISBN 4-88202-505-1 C0397 落丁本・乱丁本はお取替いたします



わが心の子らよ

Ces enfants de ma vie

ガブリエル・ロワ
真田桂子訳

彩流社

CES ENFANTS DE MA VIE

by

Gabrielle Roy

Copyright © Fonds Gabrielle Roy

Japanese translation rights arranged with

Fonds Gabrielle Roy

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

Published in Japan in 1998 by SAIRYUSHA

目次／わが心の子らよ

凍てついた川のます
5

ヴァンチェント
101

クリスマスの子
115

ひばり
141

デメトリオフの息子
167

アンドレの家
201

訳者あとがき
247

凍てついた川のます



私の教師歴を通して、その子ほど、出会う前から私を不安に陥し入れた生徒はいなかった。その頃の私と言えば、平原のまった中の人里離れた村に赴任してきたばかりで、まだ何もわからず全くの無防備であった。

出だしはすこぶる好調で、生徒たちとの関係もうまくいき、私はすっかり上機嫌で、雑貨店の隅の郵便カウンターで誰かと雑談をしていると、必ずと言っていいくらい、こちらの初々しい意気込みを消沈させるような言葉が返ってくるのであった。

「まあ、すっかりうまくいっているのね。それはよかったわ、本当に。せいぜい今のうちに楽しんでおくことね。メデリックが現れたなら、きっとそんなわけにはいかないから」

私は、メデリックが定規で彼を罰しようとした「前任の女教師」を小刀の先で脅して、すっかり震え上がらせたことを聞いた。彼との関係は闘いにならざるを得ないことを言ってきたかきせないものはいなかった。そう、それは勝つか負けるかの闘いなのだと。そして実際にメデリックと私との間にはまさしく闘いがあった。しかしそれは、彼らが予言したよりずっと複雑で不可思議なものだった。私たちは二人とも、いわゆる鎧をつけることもなく、丸裸のまま向かい合ねばならなかった。

九月の始めの二週間がまたたく間に過ぎ去った。ほとんどの農場でも、骨の折れる農作業は一通り片がついたようだった。刈り上げられた小麦は分配されて、村の大きな倉庫に収められた。倉庫の前を通りかかると、小麦が実っていくときの夏のあの気だるい甘い薫りとは異なった、つんとくるような匂いが漂っていた。刈り入れを手伝っていた年長の子どもたちはほとんど皆、一人また一人と学校に戻ってきた。そう、あのメドリックを除いては。そして私は彼を待ち続けた。時間が経つにつれ私の想像はたくましくなり、不安におののきながら、日増しにメドリックは、どうしようもなく忌み嫌うべきものへとふくれ上がっていった。そしてある日、仕事に忙殺され、すっかり彼のことなど忘れ果てていたときに、メドリックはまるで人を手玉に取るかのように、意表をひいてひょっこりと私の前に現れた。

私は黒板に向かって問題を書いていた。すると突然、背後がシンと静まり返るのを感じた。私はその異様な気配を察知して教室を振り返った。生徒たちはもう授業どころではなかった。年長組も年少組もくぎ付けになったように、平原のはるかかなたからぐんぐんと近づいてくる白い点を見つめていた。私もそれに目をやった。白い点はみるみるうちに黒いたてがみをなびかせた馬に変わった。そして馬の背にほとんど平伏すようにまたがって、いきり立っている馬を荒々しく鞭打っている若い騎手の姿が目に入ってきた。彼は、頭の後ろに大きなカウボーイ・ハットをたらししていた。その帽子はもっと近づいて見ると、故意に邪険に扱われでこぼこになっているような痕があった。

子どもたち同様に、私もすっかりこのセンサーショナルな到着に氣をとられてしまったが、すぐにそれがメデリックであることに氣がついた。

メデリックは校庭の入口へとたどり着いた。それから道を進むかわりに、馬を駆け立て有刺鉄線を飛び越えた。馬はそのまま勢いづいてユニオン・ジャックがはためいているポールのところまで駆け込んできて、ようやく止まった。メデリックはパツと馬の背から飛び降りると、その馬をポールにつなぎとめた。馬は荒々しく頭を振り、ポールは激しく揺れて、旗はまるで疾風を受けたかのようにはためいていた。そんな狂氣の沙汰と思われる暴走劇のあと、当の本人のメデリックは少しもあわてる様子もなく、むしろゆっくりと足を引き摺り、まるで私たちをじらすかのように体を左右に揺らしながらやってきた。

ついにその少年は、大きな帽子を正面に真深にかぶり直して教室の入口に現れた。彼はそこに足を広げ、ズボンのポケットの奥に手をつ込んで傲然と身構えた。腰には鉾を打ったベルトをしめ、メキシカン風の模様が入ったヒールの高い長靴をはいていた。メデリックは、身じろぎもできずにいる私たちを軽蔑と憐れみが入り混じった目差しでじろじろと見た。しかし、その虚勢の目差しの裏には翳りが宿り、すでに長い孤独を味わったことがあることを物語っていた。それからしなやかな足取りで、まるで街頭^{まちなか}にでもいるかのように、何の氣がねもなしに口笛を吹きながら、つかつかと教室の真ん中の通路に歩み出た。

当時、田舎の学校のはとんどの教室には二人がけの長机が据えつけられていた。それぞれの机の

はしにはインク壺が取りつけられており、鉛筆を入れるための溝があった。また内側には引き出しが二つあった。

メデリックは教室の中央へとやって来た。中央の机の片側には年少組の生徒の一人が腰かけていた。メデリックはその少年の傍にドサリと座りこんだ。それからぞんざいに腰を振って、その少年を左側の通路へと追いやった。そしてどっかりと腰を降ろしてその机を一人占めにした。それと同時に、私に矢のように鋭い視線を投げつけたが、そこには横柄さというよりも、他にやりようがないため、ここで少し悪戯でもして楽しんでやろうという思いが垣間見えた。

私は泣きじゃくっているおちびさんを助け起こし、床に散らばった持ち物を拾い集めて後ろの席に移るのを手伝った。

「いらっしゃい。まだしつけのなっていない大きな駄々っ子の近くにいるよりも、こっちにいる方がずっといいわよ」と言いながら。

私はこんな調子でもっと言っただけでやめたかったが、何とかがまんして何ごとでもなかったかのように授業を続けた。しかし実際にはメデリックのことしか眼中になかった。私は目のはしであら探しをしながら彼の様子をうかがっていた。彼の方もそうであつただろう。というのも、おそらく私が我を忘れて逆上しないのに業を煮やして、いらいらとした目差しを私の方に向けていたのだ。しかし、メデリックが呆気にとられてこちらを見つめている様子から、関心を引きつけることができたのだと内心思い、それを長引かせようとあれやこれやと手を尽くしていると、メデリックは私の鼻の先

でわざとらしく大あくびをしながら、その細長い足を通路の方に投げ出した。こうしてそこを通る者を引っかけて、ひっくり返す準備を整えたのだった。私が通路に足を踏み入れると、彼は開いたその足をほんの少しだけお引っ込めあそばした。

私は成り行きに任せることにした。というのも一体私に何ができたというのだろう。私は十八で、彼はもう十四歳になろうとしていた。メ德里ックの背だけは、頭ひとつ軽く私を抜いていたし、おそらく私より人生の様々なことにずっと通じているようだった。

このように私の意思とは関係なく、初めから最も効果があったのは私自身の不器用さだった。その年頃の少年にどんな風に対応したらいいのかわからずに、あえて何もせず、何も言わずよそよそしく無関心な態度を保っていたことが、結果的にこの上もなく彼をいらだたせたようだった。どうしても私がとり乱さないのに業を煮やしてか、メ德里ックはノートをちぎっては丸めて糊をつけ、定規を発射台の代わりに指先を器用に動かして、天井に向けて飛ばし始めた。こうして悪戯を始めたものの、私がほとんど関心を示さなかったため、楽しんだのもつかの間、ほどなくそれにも飽き飽きしてきた様子であった。しかし他にすることもなく、嫌々ながらもそれを続けざるを得ないようであった。こうしてまたたく間に一日が過ぎ去った。四時になるとクラスの全員が帰り仕度を始めた。私はその時になって彼を呼び止めようと初めて名前を呼んだ。

「メ德里ック・エイマール」

彼はきびすを返して振りかえった。目は爛々と輝き、見構えるように手を固く握りしめていた。

「ちょっときもと話しがしたいのよ。何だか怖がっているみたいね」

メデリックは目をそわそわと動かし、恐がっていると思い込むなんて、馬鹿げたことだと言わんばかりに私を笑いとばそうと、クラスの誰かの同意を求めているようだった。しかし、彼の影響力はもうどこかに行ってしまったのか、彼を支持する者はほとんどいないようだった。連帯はくずれたようだった。ちょうど浜辺にうち上げられた木片のように、メデリックは教室の中でただ一人孤立していた。彼はもう一度、空威張りをしながら自分の席に戻った。私が黙り込んでいるなかで、やがてメデリックは爪を噛みはじめた。私は教壇で平静を装いながら書類の整理をしていた。そして手帳を開きながら、仕事に没頭しているふりをした。本当のところは、心が静まるのをひたすら待っていたのであった。大分たって、私はようやくメデリックの方に目を上げた。彼の方も私に目を向けるのが容易ではないようだった。こんなに距離を置いて教師が生徒に話しかけるなんて、随分馬鹿げたことのように思われ、私は立ち上がり、いささか不安気にスカートのはしを握りしめながらつかつかとメデリックの席まで進み出た。そして彼の座っている机の端に腰かけた。メデリックは私のために少し足を引いた。私たちはお互いに、前を見つめながら黙って座っていた。どれだけ時間が経ったかわからなかった。私は頭を振って髪の毛を後ろに流した。そのとき髪の毛の二房が顔にかかり、私はその合間から気づかれないようにそっとメデリックを観察した。結局、彼はほんの子どもでしかなかった。痩せこけた体つきはどこか繊細で、華奢なうなじをのぞかせていた。とりわけ、果てしもない彼方をさ迷っているような目差しが私をハッとさせた。その瞳の色は後に

も先にも、その時しか見たことがないような印象的な色だった。それは蒼と紫の中間のような色で、まれに夏の夕暮れを染める空の色を思い起こさせた。

密生した黒くて長いまつげの下で、その眼は戸惑ったようなおどおどとした極まりの悪さを漂わせていた。私は下宿の女主人の言葉を思い出した。「メデリックの天使のようなあの瞳に惑わされてはだめよ。あの眼でよけいに人をたぶらかそうっていうんだから」とにかく黙って彼の傍に座っていることで、メデリックはすっかり怖気づいているようだった。お互いにどうしてそうやってしまうのか分からなかった。私はもうしばらく無言のままだった。机の端で手を組んで、こうしてただ黙っていることが、気づかないうちに彼に対して大きなプレッシャーを与えているようだった。

とうとう私はまるで一人言を言うように話し始めた。

「そうね、もし視察官とか、司祭とか、いわゆるユーモアの感覚のないそういう人たちがやって来て、あるいは単に教育委員会から誰かがやって来て、『この天井の奇妙な飾りは一体誰がやったんですか』と尋ねたら、私としてはこんなふうに説明するしか答えようがないわね。『受持ちの最年長の生徒がやったんです。それでその生徒ときたら、私の言うことなんてちっとも聞かないんです。何しろ私よりも一回りも大きいものですから』」

私は一息ついた。

『「……おまけに、もしそうしてくれるとして、これを全部とり払うことができるくらい背が高いのもその生徒一人なんです……」』

相変わらず遠くに目をさ迷わせながら、メデリックは明らかにショックを隠し切れない様子であった。肩を落とし顔面に広がった苦渋の表情から、私の言うことが正しいことを認めざるを得ないと感じているようだった。

すると彼はいきなり席を離れ、教室の後ろにある踏み台を探しに行った。そしてそれに乗ると、箒を使いながら昼間しかした悪戯の後片づけを始めたのだった。私は下から、「そこにも、ほら、そこそこ」と声をかけながら手伝った。

彼が仕事を終えて顔を真赤にしながら踏み台を降りた時、メデリックのその表情は、怒りというより、掃除婦まがいのことをさせられて呆気に取られているといったふうだった。彼は挑戦と困惑が入り混じった表情で私の方をしげしげと見つめていたものの、一刻も早くその場を立ち去りたいという様子であった。そしていきなり、何のあいさつもなしに教室の外に飛び出した。メデリックは馬に飛び乗ると大きな帽子をうなじに垂らし、荒々しい声を馬にかけて一目散に駆け出した。そして今度はみるみるうちに小さくなって、今朝方見たようにだっ広い平原の黒と白からなる一つの点になってしまった。私はその点をずっと目で追いかけていったが、やがて藍色の地平線のかなたにのみ込まれるように消えていった。窓際で私は一人それを見つめていた。その光景は、少年時代に別れを告げんとする頃にめぐり会う言いような深い孤独を物語っているようだった。

II

これでメデリックに勝利したと思ったら、それは大間違いであった。確かに彼はもう人前で私の顔をつぶすようなことはしなかった。彼はゲームの規則に従うようなふりをして、教室ではカウボーイハットを脱ぐことに同意すらした。朝帽子を脱ぐとき、メデリックはわざわざ私のところまでやって来て大げさな身ぶりで挨拶をするのであったが、それは心底からの礼儀正しさからとは到底受け取れなかった。しかし、こうしてクラスの誰かをからかうために私たちのなかに伍しているとき以外は、彼はいつもつかみどころがなかった。私はそんな彼の注意を引こうと、必死になってあれやこれやと手を尽くした。しばしば、ほんの一瞬ではあったが私に見入っていると思うやいなや、彼の心はするりとどこかに行ってしまうのだった。メデリックは目を遠くに漂わせ、私たち皆を無視するかのように、一人夢想の世界へと旅出ってしまうのだった。私は内心では、こんな不埒者は地獄にでも落ちてしまえ、と何度か思いながらも悲しみを隠しきれなかった。メデリックが現れる前は私のクラスはあんなにもうまくいっていたのに、どうしてこの私がこんな問題児を引き受けなければならぬのかと自問した。私は、二度三度とメデリックを完全に無視して、それは彼が望むところでもあるのだから、教えもせず、怠惰のままに放っておこうと試みた。しかし、彼を何

としても向上させたいという強い欲求に促された。その思いは熱狂のように私を包み、愛のように否応なく私を駆り立てるのだった。実際にそれは、愛に違いなかった。生徒たちのそれぞれに最良の結果を得させたいという強い思いは、私がずっと抱き続けた思いであり、今もそう願って止むことはなかった。

私はメデリックのそばに寄り、すぐにどこかへふらふらと逃げ出してしまいかねない魂を揺さぶってつかまえようとした。時折、そのうつろな表情にわずかながらも兆しのようなものが浮かんでは、関心を引きつけることができたのではと思っても、すぐさまどこか遠くの手の届かないところに心をさ迷わせてしまうのだった。たまに近寄ってそっと身構えながら様子をうかがうと、彼はまるで、無抵抗のまま結局捕えられてしまう無垢な動物でもあるかのようなだった。そして私の方も捕えることを望みながらも、そのことにある種の罪悪感を抱かずにはいられなかった。メデリックは夢見心地のなかで、果てしもなく遠くをさ迷っているに違いなかった。というのも、私ががまんしきれず少し声を大きくして彼を呼ぶと、いつもハッとして何かをふっ切るように首を振り、教室の勉強机に座っている自分自身に帰るまでしばしの時間を要するのだった。私はそんな想像の旅から彼をつれ戻すことにためらいを覚えた。彼のそんな旅は、すべてが幸福なものだとは思えなかった。瞳に広がる憂愁から、旅のさ中でしばしばつらい思い出のなかをさ迷っていることが見てとれた。しかし、そんな夢想が、最も傷つきやすい年頃の子どもにとつて、誰にも邪魔されない格好の隠れ家となるのであった。私が最もためらいを覚えたのは、そんな内面の彷徨から彼を引き離す